

「全鍍連」 2021年 12月号 理事長のよこがお

長野県鍍金工業組合 理事長 服部 俊直 (信越理研(株) 代表取締役社長)

「今、想うこと」



今年、3月4日に、当社創業者で私の父親である服部好男が満91歳で亡くなりました。

父は昭和4年12月30日に長野県飯山市に生まれ、大変雪深いところで生まれ育ちました。その後、大学を日本大学理工学部工業化学科に進み松本誠臣先生たちと一緒に学んだそうです。

卒業後に就職した愛国鍍金の話をよく私や社員に話しておりました。当時、分析をして鍍金液の管理をすることが珍しく、職人さんと喧嘩になったそうです。分析するまで待ってくれと言うのですが、大学出たばかりの若造を相手にしてくれず、硬質クロムの液をかってに調整するのですがその値が分析値と変わらず職人さんの経験値と実力の凄さに驚いたそうです。

その後、長野に戻ってきて28歳で会社を興しました。会社設立60周年の時のその当時を振り返っての言葉をここに記します。

『思えば若干28歳で創業の決意をしたのは、山本有三の路傍の石の小説にある「たった一人しかない自分を、たった一度しかない一生を、本当に生かさなかつたら人間生まれてきたかいが無いじゃないか」この言葉に陶醉し励まされ地盤も看板も靴も無い私が徒手空拳で大海原に一石を投じるべく事を興したのは昭和33年の7月の事でありました。

当時は金足りない、人足りない、設備足りないの、足りないづくしでありました。強いて足りるものをあげるとすれば成せば成るの、強い意志と根性。そして常に陰になりひなたになりして苦難は幸運の門といい、私を励まし続け協力してくれた妻であると思う。』

そんな思いで、会社を経営してきたのだから愛社精神はずば抜けてすごいものでした。「うちの会社は、本当に素晴らしい会社だからお前、会社を継げ」と私に言い続けました。

兄は医者になってしまったので、後継ぎは私しかいなかったからでしょうか、ある意味、会社を存続させるために一生懸命だったのかもしれない。

大学を出て東京の一流会社に勤めた私に、「はやく戻って来い」と何度も言われ会社に戻って来てびっくりしたのを、今でも覚えております。私が戻ってきて最初に思ったことは、「こんな会社に戻ってきて良かったのか」と言うことでした。所謂、3K企業で社員も20人弱で売り上げも2億円ぐらいだったと思います。

あれから、30年父と二人三脚でがむしゃらに頑張ってきました。社員にも運にも恵まれ、社員数は当時の6倍、売り上げは20倍にもなりましたが、最後まで父は私に「今日の小成に甘んじる事無く、今日の最高は明日の最低と謙虚に考

え会社の更なる隆盛を期し精進努力を重ねて参る覚悟で経営を行っていきなさい。」とっていました。

父に言い尽くせないほどの感謝と敬意の気持ちでいっぱいです。そして、私を会社に連れてきてくれたことに心から「ありがとう」と伝えたいと想っています。そして、父から貰ったバトンを、次の世代まで渡せるよう会社と鍍金組合の繁栄の為、努力を惜しまずやってゆく所存です。